慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	彙報
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.51 (2020. 3) ,p.i- xxiv
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000051-0345

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙　　報

◇人　　事（2019年1月～12月）

2019年 2月 4日	野元　晋	ドイツへ出張（2月15日帰国）
2019年 2月28日	マーティン，ロジャー	兼任所員退任
2019年 3月 3日	タンクレディ，クリストファー	米国へ出張（3月17日帰国）
2019年 3月 4日	小池　和子	ドイツへ出張（3月31日帰国）
2019年 3月11日	野元　晋	フランスへ出張（3月19日帰国）
2019年 3月31日	関　哲行	兼任所員退任
2019年 3月31日	山本　英史	兼任所員退任
2019年 4月 1日	太田　絵里奈	兼任所員就任
2019年 4月 1日	中西　悠喜	兼任所員就任
2019年 4月 1日	西貝　裕武	兼任所員就任
2019年 4月25日	北原　久嗣	米国へ出張（5月7日帰国）
2019年 5月23日	川原　繁人	韓国へ出張（5月25日帰国）
2019年 7月 1日	テーボルト，ジョセフ	兼任所員就任
2019年 8月 1日	小池　和子	ドイツへ出張（9月16日帰国）
2019年 8月 4日	北原　久嗣	米国へ出張（8月12日帰国）
2019年10月24日	小池　和子	ドイツへ出張（10月29日帰国）
2019年10月24日	北原　久嗣	米国へ出張（11月1日帰国）
2019年11月16日	加藤　昌彦	ミャンマーへ出張（11月27日帰国）

◇言語文化研究所特殊講座（2019年度）

サンスクリット初級Ⅰ・Ⅱ	火曜日２時限	入山　淳子
サンスクリット中級Ⅰ・Ⅱ	金曜日５時限	入山　淳子
アラビア語基礎Ⅰ・Ⅱ	月曜日２時限	野元　晋
アラビア語現代文講読Ⅰ・Ⅱ	月曜日２時限	榮谷　温子
アラビア語古典Ⅰ・Ⅱ	水曜日３時限	太田　絵里奈

アラビア語文献講読Ⅰ・Ⅱ	水曜日２時限	野元　晋
ヴェトナム語初級Ⅰ・Ⅱ	月曜日４時限	嶋尾　稔
ヴェトナム語中級Ⅰ・Ⅱ	月曜日３時限	嶋尾　稔
ヴェトナム語文献講読Ⅰ・Ⅱ	木曜日５時限	多賀　良寛
ペルシア語初級Ⅰ・Ⅱ	金曜日４時限	井上　貴恵
ペルシア語中級Ⅰ・Ⅱ	金曜日４時限	杉山　隆一
タイ語初級Ⅰ・Ⅱ	水曜日４時限	三上　直光
タイ語中級Ⅰ・Ⅱ	火曜日２時限	ポンシー・ライト
トルコ語初級Ⅰ・Ⅱ	月曜日２時限	石丸　由美
トルコ語中級Ⅰ・Ⅱ	月曜日３時限	石丸　由美
カンボジア語初級Ⅰ・Ⅱ	火曜日４時限	三上　直光
朝鮮語文献講読Ⅰ・Ⅱ	木曜日４時限	野村　伸一
ヘブル語初級Ⅰ・Ⅱ	木曜日２時限	髙井　啓介
ヘブル語中級Ⅰ・Ⅱ	木曜日３時限	髙井　啓介
古代エジプト語初級Ⅰ・Ⅱ	金曜日３時限	田澤　恵子
古代エジプト語中級Ⅰ・Ⅱ	金曜日４時限	田澤　恵子
アッカド語初級Ⅰ・Ⅱ	月曜日２時限	伊藤　早苗
アッカド語中級Ⅰ・Ⅱ	月曜日３時限	伊藤　早苗
日本手話初級Ⅰ・Ⅱ	水曜日１時限	數見　陽子
日本手話中級Ⅰ・Ⅱ	水曜日１時限	小林　信恵
ビルマ（ミャンマー）語初級Ⅰ・Ⅱ	木曜日３時限	加藤　昌彦
ビルマ（ミャンマー）語中級Ⅰ・Ⅱ	木曜日４時限	加藤　昌彦

◇言語文化研究所公開講座（2019年度）

テーマ：『ビザンツの文化的伝統の形成』

10月 5日（土）14時00分～ 16時00分

講師：田中　創（東京大学准教授）

演題：カルケドン公会議議事録から見る初期ビザンツ社会

10月19日（土）14時00分～ 16時00分
講師：大月康弘（一橋大学教授）
演題：コンスタンティノス７世ポルフィロゲニトス（在位905～959年）
　　『帝国の統治について』とは

10月26日（土）14時00分～ 16時00分
講師：大森正樹（南山大学名誉教授）
演題：ビザンツ的綜合の精神
　　―グレゴリオス・パラマスに見る伝統の「継承」と「改新」―

◇**研究所雑報**（2019年度）
言語文化研究所総会
2019年 3月 2日（土）
講師：小池和子（言語文化研究所准教授）
演題：「Thesaurus Linguae Latinae とラテン語辞典編纂」

◇**慶應言語学コロキアム**（2019年1月～ 12月）
1月12日（土）・13日（日）
講師：西山佑司（慶應義塾大学名誉教授・明海大学名誉教授）
演題：意味論における内在主義と外在主義―Internalism vs. externalism in semantics

1月19日（土）
講師：高野祐二（金城学院大学）
演題：併合の新たな適用と二重側方移動

1月20日（日）
講師：高橋将一（青山学院大学）

演題：Pronouns, determiners, and the typology of movement

3月19日（火）

講師：斎藤　衛（南山大学教授）

演題：KP 仮説下におけるラベル付けと格与値

4月20日（土）・21日（日）

講師：那須川訓也（東北学院大学教授）

演題：音韻階層構造と外在化

6月8日（土）

Keio-Nanzan One Day Workshop on Minimalist Syntax

講師：Koichi Otaki, Miloje Despić, Michael Hamilton, Mamoru Saito, Masahiko Takahashi

共催：南山大学言語学研究センター

7月27日（土）・28日（日）

手話言語学夏期講座

講師：浅田裕子（昭和女子大学）、内堀朝子（日本大学）、川崎典子（東京女子大学）、坂本祐太（明治大学）、下城史江（手話教師センター）、馬場博史（関西学院大学）

共催：東京手話言語学研究会（TOSLL）

8月24日（土）・25日（日）

講師：北原久嗣（慶應義塾大学）・豊島孝之（東北学院大学）

コメンテーター：大石正幸（東北学院大学）

演題：【拡大研究会 No.3】MERGE and Language Design

9月28日（土）・29日（日）

講師：今井邦彦（東京都立大学名誉教授）、外池滋生（ハワイ大学客員研究員）、中島平三（東京都立大学名誉教授）、西山佑司（慶應義塾大学名誉教授・明海大学名誉教授）

コメンテーター：阿部　潤（元東北学院大学）、小町将之（静岡大学）

演題：生成文法理論：その総括と課題―訳書『チョムスキーの言語理論』（2019）を踏まえて―

10月19日（土）

講師：宮川　繁（MIT 教授）

演題：Current Issues in Minimalist Explorations

11月2日（土）・3日（日）

講師：Andreas Blümel（University of Göttingen）

コーディネーター：後藤　亘（東洋大学）

演題：Do Exocentric Structures Exist in Syntax?

11月30日（土）

講師：池内正幸（名古屋外国語大学）

演題：【拡大研究会 No.4】言語の起源・進化研究―最近の動向・試みと Chomsky の立ち位置をめぐって

◇イスラームセミナー（2019年1月～ 12月）

4月26日（金）

講師：Sajjad Rizvi（エクセター大学アラブ・イスラーム研究所准教授）

演題：“Contesting Avicenna, Debating Mulla Sadra in Safavid Iran”
（アヴィセンナに挑むモッラー・サドラー：サファヴィー朝イランの哲学論争とその影響史）

12月19日（木）

講師：Charles Burnett（ロンドン大学ウォーバーグ研究所教授）

演題：‘The philosophy of a ninth-century astrologer, Abū Maʿshar of Balkh’

（占星術師バルフのアブー・マアシャル（9世紀）の哲学）

◇ Theoretical Linguistics at Keio (TaLK)（慶應理論言語学）

TaLK は理論言語学の分野でワークショップ、セミナー、学会等を開くフレームワークで、年毎にその言語学のサブフィールドや担当者が替わる。2019年度は、加藤昌彦が担当し、ミャンマーとその周辺で話される諸言語についての研究集会を開催した。日時や参加者は下記のとおりである。発表は英語で、議論は英語とビルマ語を用いて行った。

TaLK2019：Myanmar Linguistics, State of the Art

日時：2019年11月2日（土）・3日（日）

会場：三田キャンパス東館 G-Lab

Presenters:

Tun Aung Kyaw (Yangon University of Distance Education, Myanmar)

Mya Mya Win (Myeik University, Myanmar)

Nyein Nyein (Yangon University, Myanmar)

Sawada, Hideo (Tokyo University of Foreign Studies, Japan)

Okano, Kenji (Tokyo University of Foreign Studies, Japan)

Thuzar Hlaing (Tokyo University of Foreign Studies, Japan)

Huziwara, Keisuke (Kyoto University, Japan)

Otsuka, Kosei (Osaka University, Japan)

Shimizu, Misato (Osaka University, Japan)

Thu Thu Nwe Aye (Osaka University, Japan)

Kato, Atsuhiko (Keio University, Japan)

Discussant：

Yabu, Shiro (Professor Emeritus, Osaka University, Japan)

◇**共同研究**（2019年度）

公募研究

「テクストの伝統生成―中世から近世におけるインテレクチュアル・ヒストリー」

赤江雄一（代表）、井口　篤、岩波敦子、鎌田由美子、徳永聡子、野元晋、松田隆美、山内志朗

第４回研究会としては2018年３月５日に鎌田由美子による「ペルシアの画論に見る伝統―中国、日本、ヨーロッパとの比較から」と題された報告を巡り、ムガール皇帝の宮廷のなかで出現してくる画論の伝統を巡って議論が交わされた。

初年度の研究会および研究会以外での個別の議論を通じて、テクストに照準をあてた「伝統」を議論するという問題設定の共有をはかった。中世から近世についての理解についての学説史についても、同様のアプローチをとることが可能であり、それは論文集に反映させることが可能と考えている。2020年に開始する次期プロジェクト「時間支配とテクスト生成――古代から近世における比較思想史的研究」では問題意識を引き継いでいただいており重なるメンバーもいるので、連携を頂きながら、本公募研究での成果の取りまとめにつとめ、２年後の論文集の刊行を期したい。

（文中敬称略、文責・赤江雄一）

Ｂ方式

・「東南アジア諸言語研究会」

加藤昌彦（代表）、三上直光、上田広美、岡野賢二、春日　淳、澤田英夫、清水政明、鈴木玲子、峰岸真琴

今後当面の間、本研究会で検討し作成した調査票に基づき、メンバーが専門とする各言語のいわゆる「事象キャンセル」の現象を検討することとした。事象キャンセルとは、「彼を殺したが、彼は死ななかった」と日本語に直訳できるような文ないしは発話が意味論的あるいは語用論的に適格なものとして成立する現象である。2019年に行った研究会の内容は下記のとおりである。

3月 1日

加藤昌彦が「ポー・カレン語の事象キャンセル」と題し、東部ポー・カレン語（ミャンマー東部およびタイ西部で話される少数民族言語）についての報告を行った。また、報告の後、「事象キャンセル調査票（終点への到達が含意されるか否かについての調査票）2019年3月1日版（2018年1月30日版に基づく）」の変更内容を参加者全員で確認した。

5月11日

澤田英夫が「事象キャンセルに関する調査：ロンウォー語」と題し、ロンウォー語（中国雲南省およびミャンマー北部で話される少数民族言語）についての報告を行った。

7月22日

事象キャンセル調査票や当現象に関する資料を閲覧することのできるウェブページを作成し、共同研究のメンバー全員がアクセスできるようにした。

10月 5日

岡野賢二が「事象キャンセル調査票調査結果・ビルマ語～ 2019年3月1日版（2018年1月30日版に基づく）」と題し、ビルマ語についての報告を行った。

・「生成文法研究会：基礎仮説の再考」

北原久嗣（代表）、内堀朝子、成田広樹、Roger Martin、杉岡洋子

本年度は、電子メールでの専門知識・意見の交換に加え、日本英語学会第37回大会ワークショップ「言語の多様性再考：外在化の観点から」(11月9日）の企画に協力すると同時に、本研究会のメンバーが講師として研究成果の一部を発表した。今後も慶應言語学コロキアム、国内外の学会・研究会と連絡を取り合いながら進めていきたいと考えている。

・「手話文法研究会」

北原久嗣（代表）、松岡和美、内堀朝子

本年度は、電子メールでの専門知識・意見の交換に加え、慶應言語学コロキアム「手話言語学夏期講座」(7月27日～ 28日）を東京手話言語学研究会

と共催した。今後も慶應言語学コロキアム、国内外の学会・研究会と連絡を取り合いながら進めていきたいと考えている。

・「比較文法研究会」

北原久嗣（代表）、斎藤　衛、瀧田健介、剌田昌信

本年度は、電子メールでの専門知識・意見の交換に加え、慶應言語学コロキアム「Keio-Nanzan One Day Workshop on Minimalist Syntax」（6月8日）を南山大学言語学研究センターと共催した。今後も慶應言語学コロキアム、国内外の学会・研究会と連絡を取り合いながら進めていきたいと考えている。

・「生成文法の哲学的意義」

北原久嗣（代表）、西山佑司、阿部　潤、小町将之

本年度は、電子メールでの専門知識・意見の交換に加え、慶應言語学コロキアム「生成文法理論：その総括と課題：訳書『チョムスキーの言語理論』（2019）を踏まえて」（9月28日～29日）を、本研究会のメンバーが企画、講師、コメンテーターとして加わるかたちで開催した。今後も慶應言語学コロキアム、国内外の学会・研究会と連絡を取り合いながら進めていきたいと考えている。

・「生成文法と言語教育」

北原久嗣（代表）、西貝裕武

初年度にあたる本年度は、電子メールでの専門知識・意見の交換に加え、月一回のペースで研究会を開催した。研究会では、言語理論・言語教育における語順の位置付けから議論を始め、中学生の英語名詞句把握（とりわけ主語把握）の問題について討議を行った。今後は慶應言語学コロキアム、国内外の学会・研究会とも連携を連絡を取り合いながら進めていきたいと考えている。

・「中東の一神教的思想風土における哲学的伝統の受容と変容」

野元　晋（代表）、青木　健、太田絵里奈、菊地達也、高橋　厚、高橋英海、俵　章浩、矢口直英、藁谷敏晴

本年度は、前年度から引き続いて翻訳テクストについて幾つか模索した。イブン・スィーナーの『救済の書』（*Kitāb al-Najāt*）より論理学（al-Manṭiq）の部以外の数点のテクストを実際に読解したが、その中には試験的に翻訳を試みたものもある。その中でイブン・ルシュド（アヴェロエス）の『形而上学大注解』（*Tafsīr mā ba'da al-Ṭabī'a*）のラムダ巻第7章は、野元が出講している本研究所特殊講座「アラビア語文献講読I、II」の本年度のテクストに取り上げられ、これに本研究会メンバーの一部は聴講した。他には前に候補に上がっていたシハーブッディーン・スフラワルディーの『照明の叡智学』（*Ḥikmat al-Ishrāq*）の第1部（論理学の部）はその第1章に既に翻訳が出版されたため（宮島舜氏によるもの：『イスラム思想研究』1（2019）：pp. 65-82所収）、いったん翻訳計画を留保し、野元が試験的にその第2部（形而上学の部）のうち、第1章と第2章の部分訳と第3章も全訳を試みた。（なお第3章の翻訳は序論を添えて、神崎忠昭・野元　晋編『自然を前にした人間の哲学―古代から近代にかけての12の問いかけ』（慶應義塾大学言語文化研究所）の一部として印刷中である。）次年度はこれらの試験的な作業を、さらに共同作業による翻訳の紀要での公刊へとつなげていきたい。

・「意味論研究会」

タンクレディ・クリストファー（代表）、今仁生美、金沢　誠、楠本紀代美、中西公子、島田純理、星浩司、テーボルト・ジョセフ

活動内容はメンバーと招待研究者の意味論関係の研究発表である。2019年に開催した研究会は次の通りである。

December 13, 2019:　Jan Wislicki

November 15, 2019:　Kristina Liefke

July 12, 2019:　Toshiyuki Ogihara

April 5, 2019:　Robert Henderson

March 7, 2019: Yurie Hara

February 15, 2019: Ayaka Sugawara

January 25, 2019: Ayaka Tamura

・「ラテン文学研究会」

小池和子（代表）、逸身喜一郎、井上秀太郎、上野慎也、大芝芳弘、兼利琢也、田中　創、日向太郎、小池　登（協力者）、小林　薫（協力者）

昨年に引き続き、Cicero, Pro Sulla の読書会を、ほぼ一月に一回のペースで開催した。

・「日本語音韻特性への数量的アプローチ」

川原繁人（代表）、佐々木美帆、佐野真一郎、杉岡洋子、杉山由希子、深澤はるか、Seunghun Lee、出丸　香、梶野早希子、竹村亜紀子、増田斐那子、桃生朋子

2019年は、ポケモン研究の多くが実を結んだ年であった。Kawahara & Kumagai (Journal of Japanese Linguistics), Kawahara & Kumagai（音声研究），熊谷＆川原（言語研究）においては、2018年に出版された論文（Kawahara, Noto & Kumagai, Phonetica）を基に実験的研究を行い、ポケモンの名前に関する様々な音象徴的性質が新たに明らかになった。また、Godoy et al. (Journal of Psycholinguistic Research) ではブラジルで話されているポルトガル語において、どのようにポケモンの名前が名付けられるかを実験的に検証し、出版に至った。また、音象徴研究を理論研究の一部として位置づけるべく、Kawahara, Katsuda & Kumagai (Open Linguistics) においては、最大エントロピーモデル（Maximum Entropy Model）に基づいて、音象徴の統計的特徴を数学的にモデル化した。Kawahara (ISAPh) では、ポケモン研究が音声学教育にどのように貢献できるかを詳細に論じている。これらのすでに出版された成果に加え、研究会のメンバーを含めた国内外の研究者とのポケモンに関する共同研究が多く進んでおり、数点の論文が査読中である（Shih et al, Kawahara & Moore, Uno et al. など）。ポケモン研究は今後も大きく発展して

いくものと思われる。

また音象徴研究はポケモンの名付けに留まらず、オムツの名前、プリキュアの名前、ディズニーキャラクターの名前、宝塚の名前、AKB のアイドル名にも広がっている。これらの成果は順次発表し、出版準備を続けている。また、2019年はアウトリーチ活動の機会にも恵まれた。上記のポケモン研究は、一般雑誌の『ケトル』で取り上げられ、三田評論の11月号にも身近な題材を科学する重要性を説いた言説を出版した。『子供の科学』には、小学生を対象とした音声学入門の記事が掲載された（ポケモン研究の紹介も含む）。ラップの研究に関して『K ダブシャインの HIP HOP カレッジ』への出演に加え、日本語ラップの牽引者である Zeebra 氏との対談が出版された。この対談でも触れられているラップ研究の教育的な意義にに関しては、『読売 KODOMO 新聞』の取材にも協力した。プリキュア名の音象徴研究の一部は『日本人のおなまえっ！』で取り上げられた。

以上の研究活動に加えて、Asian Junior Linguistics という学部生を中心とした発表会を ICU の Seunghun Lee 氏と共同で開催した。この学会によって、言語学に興味をもつ日本内外の学生がお互いに自分の研究を発表し合い、交流を持つ機会を提供することができた。国内からは東京大学・京都大学・ICU、国外からは韓国・香港・フィリピンなどの大学から参加者が集まり、有意義な議論が交わされた。また、12月に開催した『未知の言語を探る旅 アフリカ・アジアからアキバのメイド喫茶まで!?』では、言語学を全く知らない一般の方々が多く参加し、言語学の楽しさの一端をより広く知ってもらう機会を得た。

もう一本2019年の研究・教育活動の柱となったのは IPA カードである。様々な大学の学生の協力のもと、IPA カードを使ってどのような授業ができるか、どのような遊びをすると IPA の重要な概念を理解できるのか、などを練り上げ、紀要論文としてまとめた（本誌に掲載）。また、専用のウェブサイトも立ち上げ（下記参照）、随時遊び方やルールを更新している。また上記のワークショップでも、一般の方々に IPA カードで遊んで頂き、好評を得

た。　http://user.keio.ac.jp/~kawahara/IPAcard.html

・「マイボイス研究会：自己の音声の獲得・喪失・再生」

川原繁人（代表）、佐々木美帆、佐野真一郎、杉岡洋子、杉山由希子、深澤はるか、皆川泰代、有井　巴、磯部美和、岡部玲子、小林ゆきの、増田斐那子、桃生朋子

マイボイスに関しては、例年通り、2回のワークショップを行い、マイボイスの教育への応用報告論文が音声研究に出版された。また、大学での研究が社会に生かされる例として、日本大学にて特別招待講演会を行った。これらの活動に加え、今年も、学生のフィードバックがマイボイスに直接的に貢献するという事例があった。まず、昨年末に学生から「スタンプ機能があればより良くなるのでは？」との提案があり、さっそくこの機能がマイボイスに搭載された。また、どの患者様でも気楽に使えるよう、マイボイス専用のスタンプを描いてくれた学生が二名おり、これらのスタンプセットもすでにマイボイスに搭載されている。さらには、「相づち機能がつくとより良くなるかもしれない」との提案が12月の授業で学生からなされ、この新たな機能も搭載予定である。研究・教育・アウトリーチ活動がここまで潤滑に連携している例は希有なものであると思われる。また、この一連の活動が評価され、基金室の広報に記事が掲載された。

・「漢喃資料研究会」

嶋尾　稔（代表）、Nguyễn Nam、清水政明、多賀良寛、八尾隆生、伊澤亮介（協力者）、鷲澤拓也（協力者）

引き続き、漢文・字喃文を併記した写本資料『条律』（慶應義塾大学斯道文庫〈ガスパルドン文庫〉所蔵）を一字一句に注意を払いながら読み進めている。今年度は、『条律』の条文中に『皇越律例』に見えない独自の規定（村の慣習に関連する）が含まれていることや字喃表記のベトナム語訳部分に漢文部分と対応していない箇所があり別のテクストを参照している可能性があることなどの発見があった。また、同研究会の研究成果として、鄭懐徳撰

『嘉定城通志』を刊行した。

◇専任所員雑報

加　藤　昌　彦

・2019年3月1日　慶應義塾大学東南アジア諸言語研究会において、「ポー・カレン語の事象キャンセル」と題して発表。

・2019年3月10日　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究会「文法の動的体系性を探る（1）：文法の多重性と分散性」（中山俊秀氏代表）において、「ポー・カレン語の「文語体」について」と題して発表。

・2019年3月　池田巧（編）『シナ＝チベット系諸言語の文法現象2 使役の諸相』（京都大学人文科学研究所刊）に「ポー・カレン語の使役と逆使役」と題する論文を掲載 (pp. 181-203)。

・2019年3月　『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第50号に The middle marker in Pwo Karen と題する論文を掲載（pp. 21-62）。

・2019年5月26日　慶應義塾大学言語文化研究所において開催した科学研究費補助金基盤研究（B）「メコン川中流域を中心とした諸言語の言語実態と変容プロセスの研究」（林範彦氏代表）の国際研究会 *Mekong Linguistics Meeting* において、Loanwords in Karen from a historical perspective と題して発表。

・2019 年 6 月　Alice Vittrant and Justin Watkins (eds.) *The Mainland Southeast Asia Linguistic Area* (Trends in Linguistics. Studies and Monographs 314, Berlin: De Gruyter Mouton) に Pwo Karen と題する東部ポー・カレン語の概説を掲載（pp. 131-175）.

・2019年11月2日から3日　TaLK (Theoretical Linguistics at Keio) 2019 ― Myanmar Linguistics, State of the Art（別記）を主宰し、会議開催中11月3日に Mermaid construction in Burmese と題して発表（於慶應義塾大学 G-Lab）。

・2019年11月16日から2019年11月27日　科学研究費補助金基盤研究（B）「ビ

ルマの危機言語に関する緊急調査研究」（倉部慶太氏代表）の支援を受け、ミャンマー連邦ヤンゴン市及びカレン州パアン市において、東部ポー・カレン語の形態統語現象と動物語彙・植物語彙を調査。

・2019年12月7日　慶應義塾大学東館ホールで開催されたワークショップ「未知の言語を探る旅～アフリカ・アジアからアキバのメイド喫茶まで～」（川原繁人氏企画）で「ミャンマー（東南アジア）を巡る」と題して講話。

・2019年度　本研究所特殊講座「ビルマ（ミャンマー）語初級」「ビルマ（ミャンマー）語中級」を担当。

・2019年度　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員。

川　原　繁　人

A. 編集書籍

1. Hara, Yurie, Shigeto Kawahara & Seunghun Lee (eds.) (2019) *ICU Working Papers in Linguistics VII: Festschrift for Professor Tomoyuki Yoshida on his 60th Birthday*.

B. 国際学術雑誌

1. Kawahara, Shigeto & Gakuji Kumagai (2019) Expressing evolution in Pokémon names: Experimental explorations. *Journal of Japanese Linguistics 35*: 3-38.
2. Kawahara, Shigeto, Hironori Katsuda & Gakuji Kumagai (2019) Accounting for the stochastic nature of sound symbolism using Maximum Entropy model. *Open Linguistics* 5: 109-120.
3. Godoy, Mahayana C., Neemias Silva de Souza Filho, Juliana G. Marques de Souza, Hális Alves & Shigeto Kawahara (2019) Gotta name'em all: An experimental study on the sound symbolism of Pokémon names in Brazilian Portuguese. *Journal of Psycholinguistic Research*. Online first.

C. 国内学術雑誌

1. 熊谷学而・川原繁人（2019）ポケモン名付けにおける母音と有声阻害音効果：実験と理論からアプローチ．言語研究155: 65-99.
2. 川原繁人・桃生朋子（2019）「マイボイス」を使って音声学を教える有

効性について：アンケート調査の報告．音声研究23: 22-25.

3. Kawahara, Shigeto & Gakuji Kumagai (2019) Inferring Pokémon types using sound symbolism: The effects of voicing and labiality. *Journal of the Phonetic Society of Japan 23*: 111-116.
4. Lee, Seunghun, Shigeto Kawahara, Céleste Guillemot & Tomoko Monou (2019) Acoustics of the four-way laryngeal contrast in Dränjongke (Bhutia): Observations and implications. *Journal of the Phonetic Society of Japan 23*: 65-75.

D. Proceedings 論文

1. 川原繁人（2019）プリキュア名と両唇音の音象徴．日本音声学会第33回全国大会予稿集.
2. 熊谷学而・川原繁人（2019）音節構造から生じる音象徴：赤ちゃん用オムツの名前の分析．日本音声学会第33 回全国大会予稿集.
3. Wilson, Ian, Donna Erickson, Shigeto Kawahara & Tomoko Monou (2019) Acquiring jaw movement patterns in a second language: Some lexical factors. 日本音声学会第33 回全国大会予稿集.
4. Kawahara, Shigeto (2019) Teaching phonetics through sound symbolism. *Proceedings of ISAPh*.（*invited）
5. Lee, Seunghun, Shigeto Kawahara, Céleste Guillemot & Tomoko Monou (2019) The acoustic correlates of the four-way laryngeal contrast in Drenjongke stops. *Proceedings of ICPhS*: 1445-1449.
6. Kilpatrick, Alexander, Shigeto Kawahara, Rikke Bundgaard-Nielsen, Brett Baker & Janet Fletcher (2019) Predictability, word frequency and Japanese perceptual epenthesis. *Proceedings of ICPhS*: 2763-2766.
7. Kilpatrick, Alexander, Shigeto Kawahara, Rikke Bundgaard-Nielsen, Brett Baker & Janet Fletcher (2019) Japanese coda [m] elicits both perceptual assimilation and epenthesis. *Proceedings of ISAPh*.

E. その他の出版物

1. 川原繁人（2019）研究・社会・学生・家族 .『三田評論11月号』
2. 川原繁人（2019）イグノーベル賞を探せ！！『ケトル10月号』

3. Kawahara, Shigeto (2019) What's in a PreCure name? *ICU Working Papers in Linguistics VII: Festschrift for Professor Tomoyuki Yoshida on his 60th Birthday*.
4. Zeebra & 川原繁人（2019）日本語ラップと言語感覚.『mandala musica/マンダラ・ムジカ―普遍学としての音楽へ』：36-59.
5. Kawahara, Shigeto, Miwa Isobe, Yukino Kobayashi, Tomoko Okabe, Reiko Okabe & Yasuyo Minagawa (2019) Acquisition of the *takete-maluma* effect by Japanese speakers. *REPORTS of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies 50*: 63-78.

F. 招待講演

1. 川原繁人（2019）『音とことばのふしぎな世界　2019：プリキュア、ポケモンから日本語ラップまで』. 愛知大学. 12月21日.
2. 川原繁人（2019）『マイボイス：言語学者、象牙の塔を出る』. 日本大学. 令和元年度国際教養学科第5回学術講演会. 11月26日.

G. 学会発表

1. Kawahara, Shigeto, Jason Shaw & Shinichiro Ishihara (2019) Assessing tonal specifications on a token-by-token basis. International Conference on Phonetics and Phonology (ICPP). NINJAL. Dec 13th.
2. Guillemot Céleste, Tomoko Monou, Shigeto Kawahara & Seunghun Lee (2019) Prosody comes first? Phonetic realization of long vowels in Drenjongkhe. International Conference on Phonetics and Phonology (ICPP). NINJAL. Dec 13th.
3. Guillemot Céleste, Seunghun Lee, Shigeto Kawahara, Tomoko Monou & Jeremy Perkins (2019) Perception of vowel length contrast in Drenjongke (Bhutia). Seoul International Conference on Speech Sciences (SICSS). Nov 15th.
4. Kawahara, Shigeto, Jason Shaw & Shinichiro Ishihara (2019) Do Japanese speakers always prosodically group wh-elements and their licenser? Implications for Richards' (2010) theory of wh-movement. Annual Meeting of Phonology (AMP). Stony Brook University. Oct 11th.
5. 川原繁人（2019）プリキュア名と両唇音の音象徴. 日本音声学会第33回全国大会. 清泉女子大学. 9月28日.

6. 熊谷学而・川原繁人（2019）音節構造から生じる音象徴：赤ちゃん用オムツの名前の分析．日本音声学会第33回全国大会．清泉女子大学．9月28日．
7. Wilson, Ian, Donna Erickson, Shigeto Kawahara & Tomoko Monou (2019) Acquiring jaw movement patterns in a second language: Some lexical factors. 日本音声学会第33 回全国大会. 清泉女子大学. 9 月28 日.
8. Isobe, Miwa, Reiko Okabe, Yukino Kobayashi, Shigeto Kawahara, Tomoko Monou, Kazuhiro Abe, Rei Masuda, Sae Miyahara & Yasuyo Minagawa (2019) Comprehension of Japanese passives: An eye-tracking study with 2-3-year-olds, 6-year-olds and adults. Experimental Psycholinguistics Conference. Mallorca, June 25th.
9. Erickson Donna, Ting Huang, Caroline Menezes & Shigeto Kawahara (2019) Using jaw movement patterns to visualize prosody. Workshop accompanying ICPhS 2019. Melbourne. August 7th.
10. Lee, Seunghun, Shigeto Kawahara, Céleste Guillemot & Tomoko Monou (2019) The acoustic correlates of the four-way laryngeal contrast in Drenjongke stops. ICPhS 2019. Melbourne. August.
11. Kilpatrick, Alexander, Shigeto Kawahara, Rikke Bundgaard-Nielsen, Brett Baker & Janet Fletcher (2019) Predictability, word frequency and Japanese perceptual epenthesis. ICPhS 2019. Melbourne. August.
12. Kawahara, Shigeto, Jason Shaw & Shinichiro Ishihara (2019) Assessing tonal specifications through simulation and classification: The case of post-wh accent in Japanese. HISPhonCog. Hanyang University. May 24th.
13. Cwiek, Aleksandra, Christoph Draxler, Susanne Fuchs, Shigeto Kawahara, Bodo Winter & Marcus Perlman (2019) Comprehension of non-linguistic vocalizations across cultures. International Cognitive Linguistics Conference 15. Aug.
14. Perlman, Marcus, Aleksandra Cwiek, Susanne Fuchs, Christoph Draxler, Shigeto Kawahara & Bodo Winter (2019) Comprehension of iconic vocalizations across languages and cultures. The 12th International Symposium on Iconicity in

Language and Literature (ILL 12). May 3rd.

15. 鈴木成典・川原繁人・熊谷学而（2019）日本語のポケモンの技名における音象徴について．Phonology Festa. Meikai University. Mar 4th.
16. 川原繁人（2019）音声実現における話者間バリエーションに潜む構造：日本語の子音持続時間の分析．Phonology Festa. Meikai University. Mar 4th.
17. Guillemot, Céleste, Shigeto Kawahara, Tomoko Monou, Jeremy Perkins, & Seunghun J. Lee (2019) A quantitative analysis of a laryngeal contrast in Dränjongk (Bhutia) fricatives. Phonology Festa. Meikai University. Mar 4th.

H. 学会企画

1. 未知の言語を探る旅 アフリカ・アジアからアキバのメイド喫茶まで !?（2019）（共同）
2. Asian Junior Linguistics IV（2019）（共同）

I. 学術雑誌編集関連

1. Linguistic Vanguard, Associate Editor（継続）
2. Natural Language and Linguistic Theory, Editorial Board member（継続）
3. Phonetica, Editorial Board member（継続）
4. Phonology, Editorial Board member（継続）
5. Journal of the Phonological Data and Analysis, Advisory board member（継続）
6. Linguistics and Philosophy at Bloomsbury Academic, Editorial Board member（継続）
7. ICU Papers in Linguistics, Advisory board member（継続）
8. De Gruyter Open（継続）
9. National Institute for Japanese Language and Linguistics, International Advisory Board（継続）

J. アウトリーチ

1. 『インタビュー：マイボイス研究』慶應義塾大学基金室特集記事
2. 『日本人のおなまえっ！』取材協力
3. 『読売 KODOMO 新聞』取材協力

4. 『子供の科学6 月号』（誠文堂新光社）特集記事取材協力
5. 『K ダブシャインの HIP HOP カレッジ』（ひかり TV・dTV）ゲスト講師
6. 『読売新聞』取材協力

K. その他の学術活動

1. 日本学術会議若手音声研究者ネットワーク代表者（継続）.
2. 音声コミュニケーション調査研究委員会委員（継続）.
3. 日本音声学会１００周年記念委員会委員（継続）.
4. 日本音声学会評議員（継続）.
5. 日本音声学会企画委員（新規）.
6. 学会アブストラクト審査（Annual Meeting of Phonology, GLOW in Asia, MAPLL-TCP-TL, NELS, OCP, Phonetic Society of Japan, Japanese/Korean Linguistics, LabPhon, WCCFL）
7. 学術雑誌査読（Educational Studies, Language and Linguistic Compass, Natural Language and Linguistic Theory, Linguistic Inquiry, Linguistic Typology, Phonetica, Phonology, Royal Society Open Science）

北　原　久　嗣

・2019年3月　本研究所紀要第50号に “Generative Procedure Revisited” と題する研究ノート を共同執筆。
・2019年2月2日　北海道大学言語学特別セミナーにおいて “Some Concepts and Consequences of 3rd Factor-Compliant Simplest WS MERGE” と題して発表。
・2019年3月16日　九州大学英語学研究会・特別研究会において “Some Concepts and Consequences of 3rd Factor-Compliant Simplest WS MERGE” と題して発表。
・2019年5月25日　北海道大学言語学コロキアムにおいて「生成文法理論：モデルの変遷とその根拠」と題して発表。
・2019年5月11日　ELSJ 12th International Spring Forum 2019（聖心女子大学）ワークショップ “Pair-Merge under MERGE” において “(Head-)Adjunction by

Pair-Merge” と題して発表。

・2019年6月22日　日本言語学会第158回大会（一橋大学）において “Labeling under Minimal Search: Determining Single- vs. Multiple-Specifier Configurations” と題して発表。

・2019年7月29日～30日　神戸大学言語学セミナーにおいて “Language Design: Seeking a Genuine Explanation” と題して発表。

・2019年8月24日　慶應言語学コロキアムにおいて “MERGE and Language Design” と題して発表。

・2019年10月26日　Arizona Linguistic Circle 13（アリゾナ大学）において “Unifying Labeling under Minimal Search in Single- and Multiple-Specifier Configurations” と題して発表。

・2019年11月9日　日本英語学会第37回大会（関西学院大学）ワークショップ「言語の多様性再考：外在化の観点から」において「多重指定部構造の再考」と題して発表。

・本塾文学部・GIC に出講。

・大東文化大学文学部に出講。

・清泉女子大学大学院人文科学研究科・文学部に出講。

・駒澤大学総合教育研究部に出講。

・法政大学理工・生命科学部に出講。

・2019年度福沢基金研究費補助「人に生まれながらにして具わる言語の仕組みとは何か：理論的意義と経験的帰結」（研究代表者）に従事。

・2019年度科学研究費助成・基盤研究（C）「日英語比較統辞論に基づく併合手続きの研究：統辞構造はどのように生成されるのか」（研究代表者）に従事。

・日本言語学会　評議員

・日本英語学会

・日本言語科学会

・Linguistic Society of America

・日本第二言語習得学会

・全国英語教育学会
・関東甲信越英語教育学会

小　池　和　子

・言語文化研究所総会記念講演会で「Thesaurus Linguae Latinae とラテン語辞典編纂」と題する講演を行う（2019年3月2日）。
・言語文化研究所紀要第50号に「Tacitus, *Dialogus de oratoribus* 試訳（IV）」を執筆（2019年3月刊）。
・2019年度春学期に「西洋古典学 I」、「ラテン語文献購読 I」、「ギリシア語文献購読 III」、「ラテン語中級 I」、秋学期に「西洋古典学 II」、「ラテン語文献講読 II」、「ギリシア語文献講読 IV」、「ラテン語中級 II」（いずれも文学部）に出講。
・2019年3月4日～ 30日および8月1日～ 9月16日に、Bayerische Akademie der Wissenschaften 所属の Thesaurus Linguae Latinae で辞書編纂作業に従事（repurgo, resigno の項目について作業。刊行は後日）、また同資料庫における調査を行う。

嶋　尾　　稔

・2019年3月　本研究所紀要第50号に「『大越史記捷録総序』注解：導入」と題する研究ノートを執筆。
・2019年3月　武内房司編『阮朝アーカブズの世界：ギメ美術館所蔵阮朝地方行政文書を中心に』学習院大学東洋文化研究所に「ギメ文書中のクメール・クロム関連史料の紹介」（北川香子氏と共著）と題する論文を執筆。
・2019年度　本研究所特殊講座「ヴェトナム語初級」を担当。
・2019年度　本塾文学部に出講。「東洋史学特殊」を担当。
・2019年度　東洋文庫研究員
・2019年度　京都大学東南アジア研究所学外研究協力者
・三田史学会委員、東洋文庫図書委員・編集委員

タンクレディ，クリストファー

論文の執筆

“Qualities and Translations” (with Yael Sharvit), *Linguistics and Philosophy*, on-line first, July 2019.

“De Qualitate Generalized”, in *Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies 50*, 2019.

“Toward a One-World Semantics,” Conference Handbook, English Linguistic Society of Japan Annual Conference, Kwansei Gakuin University, November 2019.

研究発表

“Toward a One-World Semantics,” English Linguistic Society of Japan Annual Conference, Kwansei Gakuin University, November 2019.

“*De dicto, de re* and *de qualitate* unified”, invited talks: University of Connecticut, March 2019. MIT, March 2019.

野　元　　晋

・2月　「イスラームにおけるイエス・キリスト――クルアーンから、そして後代の二つの視点から」と題する論文を浅見雅一・野々瀬浩司編『キリスト教と寛容：中近世の日本とヨーロッパ』（慶應義塾大学出版会，2019年2月刊）に発表（pp.339-258）。

・3月　“An Ismāʿīlī Thinker on Ishmael (Ismāʿīl) and Isaac (Isḥāq) 2: Translation of the *Kitāb al-Iṣlāḥ* by Abū Ḥātim al-Rāzī 14” と題する研究ノート（アラビア語テクストからの英訳）を『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』50に発表。

・3月　「二つのイスマーイール派研究――井筒俊彦とアンリ・コルバン」と題する研究発表（第77回日本宗教学会学術大会［於 大谷大学、2018年9月9日］）のアブストラクトを『宗教研究』第93巻別冊、pp.44-45に発表。

・10月　ヘルマン・ランドルト「井筒俊彦を回想して」と題する翻訳を若松英輔編『井筒俊彦ざんまい』（慶應義塾大学出版会，2019年2月刊）、pp. 108-113に掲載（『井筒俊彦全集・月報』7に掲載の翻訳の改訂版）。

・9月15日　日本宗教学会第78回学術大会（於 平成帝京大学）にてパネル

「イスラーム中世における神認識」コメンテータ。

・9月21日　第26回新プラトン主義協会大会　（於 東北大学川内キャンパス）
　シンポジウム「神、存在、創造をめぐって　―古代末期からイスラーム中世へ―」を企画・司会。

・4月より　本研究所特殊講座「アラビア語基礎 I」（春学期）、「同 II」（秋学期）を担当。

・4月より　本研究所特殊講座「アラビア語文献講読 I」（春学期）、「同 II」（秋学期）を担当。

・　4月より 本塾大学文学部に出講、「哲学倫理学特殊 I-C」（春学期）、「哲学倫理学特殊 II-C」（秋学期）、「東洋史特殊 I-A」（春学期）を担当。

・科学研究費助成事業・基盤研究（B）「井筒・東洋哲学の展開に関する比較宗教学的検討」（代表：澤井義次［天理大学人間学部］）に研究分担者として参加。（継続）

・科学研究費助成事業・基盤研究（B）「超常認識と自然観をめぐる比較心性史の構築」（代表：山中由里子［国立民族学博物館］）に研究分担者として参加。（継続）

・慶應義塾大学言語文化研究所公募研究プロジェクト「テクストの伝統生成―中世から近世におけるインテレクチュアル・ヒストリー」（代表：赤江雄一［本塾大学文学部］）に研究分担者として参加。（継続）